

# 備陽史探訪

第50号  
発行  
備陽史探訪の会  
福山市多治米町5-19-8  
TEL(0849)53-6157

## 年頭所感 十一年目の試練

会長 田口 義之

去年の春、神谷先生より会長の座を引き継いでからようやく一年が過ぎようとしています。

二月の創立十周年記念行事に始まって、五月の古墳めぐり、秋の一泊旅行……。と息づく間もないほどの行事の連続。神谷先生を始め、役員全員の御協力がなかったら、と思うと背筋がゾツとします。

会員の皆様、市民の皆様の御支援で十周年を迎え、十一年目に入った今日、私を始め、会を運営して行く者の責務は益々重大であると痛感しております。

先の十年で会の基礎はほぼ固まりました。事務局長を中心とした事務局体制の確立。城郭、古墳両研究部会は自治体から山城、古墳の測量調査を依頼されるなど今後益々の活躍が期待されています。歴史民俗部会

もようやくしつかりとした目標を定め、いよいよ始動といったところで。例会行事の方も恒例となった親と子の古墳めぐりを始め、年間計画に収めきれない程の企画が集まり、実施に汗だくの状態です。

しかし、これでよし、というわけにはまいりません。

例会について言えば、創立当初からの課題となっている「計画性」と「内容の深化」をいかに実現して行くか、今迄通りの例会でよいのか、等多くの問題は山積したままです。

又、機会あるごとにアピールしている、私達の手による、私達の「史跡めぐりパンフレット。今迄百回近く実施した例会資料の冊子化、私達の「史跡案内板の設置など、やらなければならぬことがいっぱい残っています。

「十一年目の試練」と題しましたが、試練とは何も困難を意味するだけの言葉ではありません。それを乗り切った時、本当の充実感が味わえるよい機会だと思っております。

皆様の御協力でここまでやって来れた備探の会。皆様と共にこの試練を乗り越えることによって、真の充実した、市民の、歴史愛好グループに脱皮出来るものと確信しております。会員の皆様の絶大な御支援を願って止みません。

## 円仁の入唐求法巡礼行記について

堤 勝義

円仁（第三世天台座主、七九四―八六四）の「入唐求法巡礼行記」の口語訳が、深谷憲二氏（芝公園スタジオ社長）によって、昨年の十一月に、中央文庫として、中央公論社から出版された。

訳者序文でも書かれているように、円仁の「入唐求法巡礼行記」を高く評価したのは、米国の駐日大使であった故ライシャワー博士（E・O・REISCHAUER）である。

ライシャワー氏は、日本の人は、マルコ・ポーロの「東方見聞録」は知っていても、それよりも四百年も古い、円仁の「入唐求法巡礼行記」を知っている人は少ないと云い、これは旅行記として、誇るべきものであると云っている。

ライシャワー氏には「世界史上の円仁」―唐代中国への旅―等があり、博士論文も円仁に関してであった。「入唐求法巡礼行記」四巻は、承和五年（八三八）―同十四年（八四七）の九年間にわたった唐での生活について記したものである。

円仁は天台宗の請益僧として渡唐した。請益僧というのは、乗って行った遣唐使船が、日本に帰る時にはともに帰らなければならないという短日時の滞在で、その間に經典類を持ち帰らねばならないという、余裕のないものであった。

円仁は短期でなく、どうしても、天台山に行きたかったのである。そこで策略を用いて、帰りの遣唐使船に乗りそこなったという口実で、唐に残るのである。しかし、実際は、天台山にいかずに五台山に赴くのである。

円仁は五台山から長安（約一〇〇キロ）にいき、九年間も唐に滞在

する事になり、唐の皇帝武宗の廢仏政策により、命からがら逃げ帰ることになるのである。

天台宗の留學生（長期）としていたのは円載である。円載は「とかく」風評はあるものの、会昌の廢仏の時には還俗して、妻帯し、畑をたがやかしていたというが、生きのび、四十年も唐に滞在することになるのである。以下、日記を追いながら、私の興味ある所について抜き書きを（深谷訳による）をしてみた。

円仁に従うのは、惟正、惟曉、從者の丁雄満である。留學生円載には天台山へいく通行許可がすぐに出たが、請益僧の円仁には出ない。しかし、どうしてもいきたいという思いを押える事が出来ず、前述のように策略をして、天台山でなく、たまたま偶然に五台山に赴くことになったのである。

円仁一行は五台山の普通院にいき、中に入って、文殊師利菩薩の像を礼拝し、それから、西堂の壁の上をみると、「日本国内供奉翻經大徳靈仙」元和十五年九月十五日と署名してあるのを見た。

靈仙については、五台山から長安に向かう途次、堅固菩薩院に宿泊した時に、院の僧が茶のみ話で、「日

本国の靈仙三蔵は昔この院に二年ほど滞在したが、その後、七仏教誠院に向かったが亡くなった。靈仙三蔵は自分の手の皮をはいで、長さ四寸（約十二センチ）、幅三寸（約九センチ）の中に仏像を画き、金色の青銅の塔を造って、その中に安置した」という。

円仁はその翌日に、数人の僧と共に金閣の扉を開き、青色の獅子にのった文殊師利菩薩を礼拝し（円仁の文殊師利菩薩—文殊菩薩ともいう—信仰には並々ならぬものがあつた）その折に、靈仙三蔵の納めた青銅の塔をみている。

南台の頂きから南に向けて下り、十七里（約九キロ）ほどいくと、建物が破損し、人の住んでいない七仏教誠院についた。

七仏教誠院の中には、渤海の僧貞素が靈仙上人の死を歎き悲しむ詩を板の上に書き、打ちつけてあつたという。

「（前略）：長慶五年（八二五）に日本の大君が、渤海使節に託して、靈仙三蔵に金百兩を下賜され長安に到着したので、それを長安で引き継ぎ、金と親書を靈仙の元に届けた。靈仙は金を受領し、一万粒の舍利、新訳のお経二部等を拙僧に託し、日

本に行つてほしいという靈仙の要請に応えて、日本に渡り、日本の大君から金百兩を託され、太和二年（八二六）に戻り、靈仙三蔵を探したが、死んでから、もうかなりの日数があつているという。：（後略）：」

円仁はこれを書き写している。円仁はその後、靈仙三蔵が毒殺されたということを確認している。

その後、円仁一行は長安に滞在中に、武宗の会昌の廢仏に出会っている。会昌三年（八四三）には惟曉が病気の為に死亡している。

会昌の廢仏の時に、円仁は還俗をして、日本への渡船を求めて長い旅に出る。

「山や野を行く、草木は高く深く繁り人にもめつたに逢わない。一日中、山にのぼつたかと思うと、今度は谷にくだつて入つて行き、泥水の道を踏み歩いて、つらく苦しいことはこれ以上ないと思うほどである。」

「海州から真つ直ぐ登州に着くまでの間、道はひどく悪くて、進み行くことが困難であつた。漙しなく広い野の道は狭く、草木はおいしげで、ちよつと歩けば泥ねいにつかり、たびたび前路を見失つた。：：：野原を出れば山に入り、山を出ればまた野原に入るの繰り返して、山の坂は

けわしく、谷の落込みは非常に深い。：：：蚊やあぶは雨のように降りかかり、手で打ち払つても、とても間に合わない。草の下の泥は膝が埋まり、腰がつかかるほどであつた。」

「登州は都から遠くはなれた所であるが、僧尼を強制還俗させ、寺院を破壊し、經の所持を禁じ、仏像をこわし、寺の所有物を官に没収した。：：：天下の銅鉄の仏、金の仏はどれほど数に限りのある貴重なものかわかつてはいるのに、勅に従つて、すべて破壊し尽してしまつた。」

「文登県に着く。山を越え野を渡つて、衣服はぼろぼろに破れ使い果たした。県の役所に行き県令に会い、当県の東端にある勾当新羅所に行つて、食物を求め乞うて、ただ命を延べつなぎ、その間に自ら舟を求めて、日本国に帰してほしいと請願した。」

その後、新羅居留民団長の世話で、ようやく、新羅船に乗って朝鮮半島經由で帰国するのであるが、從者の丁雄満は、連絡でよそにいつている間におき去りにされてしまうのである。

円仁の日記をみると、唐の各地に新羅の居留地があり、居留民団長が親切に世話をしてくれていることである。また、新羅船はしょっちゅう

日本に、いきましていることが、うかがわれる。

遣唐使船は日本の対新羅の關係から、朝鮮半島經由でなく、直に中国を目指していたので、難破の危険もかなり高かったであろう。

円仁は在唐九年の間に多くの經典類をあつめたが（一部は会昌の廃仏の時に失なつた）、その数は、六三六点余にのぼる。その主なものは、最澄が持ち帰らなかつた密教關係の經典類であつた。真言宗の東密に対する、天台宗の台密の初まりである。

円仁の後、天台宗では円珍（三井寺・園城寺派の開祖）が遣唐使船に乗って渡唐（八五三―八五八）するが、その時に通訳として、名前が出てくるのが、円仁におきざりにされた（やむおえずであるが）従者の丁雄満であつた。丁雄満は在唐十年とあるから、円仁帰国後、一年遅れて無事帰国したのである。多分、新羅居留民団の中に留まり、居留民団長の保護があつたのであろう。

丁雄満は再び円珍と共に渡唐したのである。円珍は大中七年（八五三）十二月十四日に国清寺で、円載に会う。円載は馬でやってきたが、そつけないものであつたというし、日本語を忘れて、中国語しかはなせない

といったという。

円珍は、弟子の豊智（のち智聡と名乗る。在唐二十三年にして無事帰国する。）を、円載にとられた事から、良い感情をいだいていなかったようである。

智聡は真如親王を越州から長安まで案内しているし、師の円載が長安で世話をしたのであろう。円載は真如とも長安で会つていたのである。

円珍は在唐五年で、新羅船の李延孝の船で無事帰国している。丁雄満は通算在唐十五年になる。

円載も円珍に十八年遅れたが、在唐四十年の滞在を打ち切つて、李延孝の船で帰国する事になった。四十年間に蓄わえた教典、儒書、数千巻といわれたというが、それを積んで帰国の途についたが、船は途中で難破してしまい、円載、李延孝ともに水死をしてしまった。

天命というべきか。

円仁や円珍のように帰国して歴史上名をのこした求法僧だけでなく、円載や豊仙三蔵のように志なかげで倒れた者や、在唐二十三年の智聡のように、通算在唐十五年の丁雄満のような人々もいたのであるという事が、円仁の日記から知られるのである。

## 一九九〇年 探訪九州路

小島 袈裟春

。吉野ケ里……昭和十三年の頃、一人の考古学者が始めて調査の鋏を入れ、遺跡の分布を確認した。以後数十年を経て、その子息が父の遺志を継いだ形で、発掘調査所の所長として指揮を取り、今回の発見に致つた。との話から調査責任者、高島忠平先生の説明が始つた。これは思ひもよらぬ感動であつた。私しはもう、このまゝ帰つても良い、とさえ思った。今や吉野ケ里は、日本全国で有名である。一九八九年三月調査の経過が、マスコミを通じて発表されるや、全国の歴史ファン、いや日本全国民の胸をときめかせたのであつた。その少し前は奈良県藤ノ木古墳、その少し前は島根県荒神谷の銅剣四一六本及び銅鐸等、その少し前は埼玉県稻荷山の鉄剣銘文、その少し前は奈良県高松塚の壁画古墳等々、めくるめくが如き近年の考古学上の、成果と云うか発見は、その実際の作業の苦しく、地味で忍耐の必要な、肉体労働であるにも拘わらず、そしてそのほとんどは報いらる事

のないまゝに忘れ去られる仕事だと云うのに、何十人か、いや何百人に一人かの考古学者が、一生に一度あるかないかの栄光を浴びる事が出来る丈だ、と云うのに。その幸運の陰の幾多の涙のある事を、つい忘れ去つて仕舞うかの如くきらびやかな報導振りではあるのだが。……ある考古学者が、切角の発見を、営々の努力の結果を発表したにも拘わらず、機未だ到らず世間にも認められず、資金も組織もないまゝに撤退せざるを得なかつた。今その子が所長として着任したのは、父の導きだつたのであろうか、それ共人の情けであつたのであろうか、子は親の背中を見て育つ、云い古されたその言葉を私しはしみじみ噛みしめたのであつた。「吉野ケ里」は、観光地化された、と誰もが云う、私もそう思った。しかし私しは機会があれば又訪ずれ度いと思う。あの巨大な楼観や弥生家屋や城柵、幾重にも巡る環濠、大環濠の外の見事な高床倉庫群、あの小高い丘は正に都城であつた、楼観から見晴らす限りの、黄金色に放打つ稲田は、その国の富の根源であつた。そしてその国を乗取ろうと攻撃して来た敵もあつた、しかも二度三度と。数ヶ所にある、墓道を挟ん

で整然と葬むられたカメ棺の主達は  
その戦いの戦死者と考え度い、首の  
ない遺骨、石鏃の刺った遺骨がそれ  
を物語る。だが戦いは勝った、国は  
益々栄える、当時の吉野ケ里の人口  
は一千人前後とパンフにもあった。

あの丘に一千人、相当の賑いである。  
現在の見学に訪ずれる人達を時間帯  
で区切れば、ほぼ同数だと私は考  
える、国々が賑い多くて悪い筈はな  
い、その雑踏の中にこそ、古代吉野  
ケ里の感触がある筈なのだから。

吉野ケ里は国営公園として整備され  
る事に決ったと云う、嬉しい事だ、  
どの範囲がどの様に整備され、どの  
様に復元が進むのであろうか、古代  
人の枯骨の安住の場所はあるのだら  
うか、今度又訪ずれるとしたらその  
一つ一つが楽しみである。

。名護屋城跡……唐津の町から約  
三十分、美味しい魚を喰べに行く人  
が多いと云う、呼古の町の西隣り、  
鎮西町の波戸岬の中間にその城跡は  
あった。山頂を削平した広大な本丸  
を中心に、西に二の丸、弾正丸、東  
南に三の丸、東出丸、北に遊撃丸、  
水手郭、山里丸、台所丸とその規模  
は大阪城に匹敵すると云われる。

実は私は大阪城を見学した事はな  
いのだが、何れにしてもそれぞれの

郭の広大さに驚きもし、又これ程の  
城が僅か五ヶ月で完成した、と云う  
事にも驚いた事であった。本丸の西  
北端、天守閣跡に立って見廻すと、  
北の加部島が北風を防ぎ、西北に突  
き出る波戸岬との間と絶好の港を形  
成する、東から東南に名護屋灣が深  
く切れ込み、西から南は木浦灣が切  
れ込んで天然の堀を形造る。大陸浸  
攻の拠点として絶好の場所なのだ  
と素人目にも思えるのであった。

それ計りではない。徳川家康、加藤  
清正、毛利輝元等々、日本六十余州  
の大名、小名百二十余りの各陣所が、  
城を中心に半径三キロの範囲にそれ  
ぞれ堀、石垣、土塁を巡らせて構築  
された（現在も大部分が残り、内の  
四十四ヶ所はほぼ完全に遺構が検出  
されると云う）。大船小船が入江を  
埋め尽し、軍兵約二十五万人（パン  
フで計算）但し渡海は約十七万、他  
に職人、芸人、商人、女性等々、三  
十万人近い大都市の出現であった。

秀吉ならず共、心躍る光影であった  
ろう。（慶長三年（一五九八年）独  
裁者、豊臣秀吉が死んだ。……城も  
浸略も殺戮も、すべてが狂気の産物  
であった。以来星霜三百九十年、  
深緑の木立は家を町を城跡を包み、  
眼前の加部島と呼古町を結ぶ二本マ

ストの斜張橋が美しく架かる。水手  
郭の辺りでは石垣の修復工事が始っ  
て、ふと気が付くと足元には秋草の  
「ツルボ」の群落が、ヒヤシンスに  
も似た可憐な花を咲かせて居るので  
あった。

。柳川市……三柱神社の近くから、  
雨の降り続く中を名物の川下り約一  
時間、乗船場で頭からスッポリとビ  
ニール合羽を被らされ行儀良く腰掛  
けた船客は、さながら片付けられた、  
テルテル坊主と云う風情であった。

でも良い事もあった、途中のウエデ  
イングホルの所で女性社員が二人  
出て居て、舟頭さんが「今日はある  
かい」と声をかけると「ありますよ  
ー」と返事をした。何んの事かと思  
って居たら、しばらくして二隻の船  
と擦れ合った。先頭の船の舳に白打  
掛けの花嫁さん、その横の花婿さん  
が蛇の目の傘を、やさしく花嫁さん  
に差し掛けて座って居た。相合傘で  
ある。思わず我々が拍手すると、二  
人が羞かみ乍ら会釈した。何んとも  
頬笑ましい「仲良くなー」私しは心  
の中で、月並みな応援を贈った。

結婚式には月並みな言葉が一番ふさ  
わしい。そして私は柳川の男女は  
皆、結婚式には船で式場入りすれば  
良いのと思った。

話しは前後するが、朝、嬉野を出た  
バスの中で名誉会長の神谷さんが、  
今日の予定に付いて説明して下さっ  
た時「柳川と聞いて何を思浮べるか」  
と質問された。私は柳川なべ、と  
云ったが前の席の女性が「白秋」と  
云った「流石」と思った。それはと  
も角今日の昼食は「ムシ鰻」との事  
だった。私は関西風のカバ焼きは  
味がどぎつくて苦手である。「御花」  
のムシ鰻は私の好みの関東風とは  
一寸違うが、皮が箸で千切れた、久  
し振りの味であった。……北原白秋

の生家……白秋の詩、と云うと私は  
は城ケ島の雨、と思う。それは私は  
が関東育ちで城ケ島の付近は良く遊  
びに行ったからである。あの橋の下  
にある石碑はそれなりの感があった。  
もう一つはからたちの花、これは私  
しの通った小学校の垣根がからたち  
だったから。白秋の生家に入って

「オヤ」と思ったのは、壁に張って  
あった「帰去来」の詩の拓本であつ  
た。帰去来、と云うと、私の頭の中  
には、中国六朝期の詩人「陶渊明」  
しかなく、一時混乱したのであつた  
が、良く考えれば誰が帰去来詩を作  
っても良い訳で、不思議に思う方が  
変なのであつた。だが測明の方は

「帰るなんいざ、田園まさにあれな

んとす」と、決然、県令の職をなげうった、格調高い詩であるのに、白秋の方は新聞社の文化賞受賞の為帰郷した時の詩で、「帰りなんいざ鶴」と浮き立つ様な調子が一寸うとまじい、でも裕福だった生家が火事の為没落して、敷居の高い故郷に「錦」を飾る、白秋の気持も考えずばなるまい。私は白秋の詩はほとんど忘れて居て、この所は白秋生家で購入した「白秋の文学碑」と云う本を見てのものであるが、この本で意外な発見をした。実は私は民謡を少し習っているのであるが、静岡県の代表的民謡の「ちゃつきり節」が白秋の作詩なのであった。白秋の詩作活動の幅広さを改めて認識した次第であった。

。岩戸山古墳…一九八二年の三月下旬に九州南部の見学旅行をした事があるが、その時これも相当の間を掛けて見学した。理由は神谷さんも云われた通り、被葬者と云うか「主」の特定出来る日本唯一の前方後円墳と覚えていたからである。そしてその特定の重要文書「筑後国風土記逸文」にある石人や石馬を是非この目で見たい、との思いもあった。「別区」にある模造の石像群を見て、古墳の上に登り石人のカケラ

でも無いかと探し廻ったが、それは無理な願いであった。帰りがけに神社の広場の隅の倉庫が開けられて居て、覗くと大小の石が無造作に積んであった、鍵を持った人に聞くと、それが石人、石馬の本物で手を触れなければ入っても良い、と云った。私は念願叶って感激したが余りにも乱雑で、どれが何やら判然としな

いのが何んとも心残りであった。今回は立派な資料館が完成して居ても、二つに割れた石馬もそれと分かる様に整然と展示されて居た。私は嬉しきの余り、カメラのフラッシュを発光させたら、館長さんに注意を受けた。これは謝まるべきである。しかし、それが切っかけで話しも出来た。古墳の発掘調査の話から、打解けたかなと思つて、岩戸山古墳の主について、発掘などして万骨が出て来たら、それは「磐井」の墓ではなくなりますね、と筑後風土記逸文の記事を引いて冗談を云つたら「学界の定説を得て居りますから」と大真面に反論されて、これには答え様がなかった。……私には岩戸山古墳の発掘調査には大反対である。

(一九九〇年十一月)

### 十月探訪、神の在りし村 襖ぎの雨の豊松村

KK生

。午前八時〇〇分、激しい雨が折畳みの傘をたたく濡らすまいとして胸に抱くりュックサック長靴が良かったな！大きい傘が良かったな！軽い後悔が胸をかすめた。バスが遅い、もう二十分も待つバスの奴め……あ、来た来たあれだ。バスの中で今日の雨占いに一しきり話しがはずむやまないな。いややむともさまあーそれはとに角、今日の講師、出内先生の御話しを聞こう神代からの氏族、翁氏の事を中世の豪族、内藤氏の興亡の歴史を……。豊松村に着いた。資料館の前でバスを降りる土砂降りの雨、そうだ……神の村に来たのだ、襖の雨だ体の汚れを流すべく、心の汚れを落すべく、

降り降り雨、滝の如くに……収蔵庫の中に神があったいや、かつてあったと云うべきかその抜け殻の数々が敵かに並べてあった。息長氏の後裔を伝承する翁氏の形見も見へる神功皇后にも繋がる息長氏は、八幡神社の宮司として何んと似つかわしい事だったのか

。子子山古墳の上に登る横穴式石室は六世紀初頭か？墳丘の上に宝篋印塔がある、墓の上に墓を作る。塚の意味が忘れられた時代があった証拠か土砂降りの雨、未だ未だ続く。幸運仏への道は泥川と化した途中の陰陽石は何んだ、単なる娯楽でも淫祠でもなく農作物の病虫害を抜う呪術の名残りなのであろう御歳神の教へと齋部広成が古語拾遺に記すが如く、今、見る人唯ニヤリとするのみ。ゲシャゲシャの靴を引きづって幸運仏と謂う、五輪塔を拜む、独特の空輪がやゝ重い、二つ並んで何を私しに語りかける墓石を埋む風習もあるとかやだが何の為に、謎は深まる計り

。酒とコンニャクのもてなしとお握りと漬物の差入れは豊松村の心なのであったろうか訳は分らずに頂いたが……

。雨は未だ未だ降り続く。恩ヶ丸城跡に登る小じんまりと低い城跡は単郭、帯曲輪、堀切りと揃うが初期からの城の様にも思われた。翁氏が代々守った八幡神社古杉に囲まれて神さびる

昔、若者達はどの様にこの祭りを待ちこがれた事か、笛の音が、太鼓の音が、雨を衝いて私しの心に響いて来る。

傘をさして新庄山城跡に登る内藤氏の本拠と聞く新庄山と東に続く古城山

。新城と云へば、古城も当然と解説者が云われた

何んと情ない質問をした私しであった事か……

### 餅つき

種本 実

餅は今日ではスーパーなどでも買えるので季節感とか、意味合いなどがファジー（曖昧）化してしまった。正月だけでなく、節句とか棟上げなどでも餅をつくがやはり正月の季節感が強い。

「餅つき」も今では余り見かけない伝統行事だが、私など子供の時は家で行っていた。家の改築に伴いやめたが、今でも妻の実家や姉宅では暮れに行っている。子供達も楽しみにしているの、我家では、一家四人が二回餅つきに出向く。幸せというべきかもしれない。各兄弟が揃って賑やかな「餅つき大会」は子供も大人達も年末の楽しい一時である。

私も三、四回杵を持つが日頃使わない筋肉に力を入れるので少々疲れる。子供達も一応杵を振りかざすのだが小三の長男ではまだまだサマになっていない。つき上がった餅を小餅にすれば、大きさも形も各人の特徴が表われて面白い。「食べてみりゃあおんなじよ。」「そりゃそうよ。」いつものやりとりが始まると餅つきも最高潮である。講師の「何年たっても

上手にならんもの。」の声も巧みな手さばきも数年前と変らない。子供達の体だけが歳月の推移を感じさせる。草戸千軒の遺跡から杵が発掘されたニュースを読んだことがある。

餅は古代稲作を中心とした農耕社会に保存食として又、神への供え物として生まれ、今日まで日本人の伝統食として受け継がれてきた。餅米を蒸してついておくこと保存食として

「もち」が良い、ところから餅といわれたとか。月に行つたうさぎが餅をつくとか愛犬を亡くした正直じいさんが餅をつくと餅が小判になったとか、昔話にも餅は欠かせない。食文化の一翼を担っているともいえよう。私も子供の頃は今では信じられない程食べていた。雑煮なら年の数

ぐらい食べたし、寒い日は火ばちに金網を渡して餅を焼きしょう油を付け食べたものである。今の子供はともかく大人達には懐かしい思い出になった。

妻の実家も新築されたので今年の餅つきは姉宅の一度だけとなる。昔風の広い土間が餅つきには欠かせない。我が子が成人した頃にはどうなるだろう。農業自体が軋機を迎えている折、餅つきも農家において消滅する日が来ないともいえない。

工業化社会、合理性が古くから受け継がれてきた農耕社会の風俗を廃してゆくように思える。今一度暮しの中の風俗、伝統行事を見つめ直したいものである。

#### 第四十九回

### 中世を読む会

城郭研究会主催

テーマ 「中世武家文書を読む」  
※今年より写真版により原本を読んでも行きます。

(時) 三月十五日(金) 午後七時(所) 福山市花園町

中央公民館第三会議室 (会費) 無料 参加自由

※初めての人はテキスト代 二〇〇円必要

(問い合わせ先)

電話 五五―〇五三五

(出内)

### 短歌

櫻井 須磨子

山寺の火曜日は瓢箪語る会と

表に掲げて主人今日留守  
黒々と袴重ねてずんぐりと  
頭出しをり先駆けの土筆

### 備陽史探訪の会

#### 平成三年度総会報告

去二月二十四日午後三時より福山中  
央公民館第一会議室に於いて平成三  
年度備陽史探訪の会総会が開かれ、  
左の議案が討議され承認されました。

#### 一、平成二年度事業報告

- 二月一日 講演会 吉野ヶ里遺跡  
と邪馬台国 講師 高島忠平  
参加約三〇〇人
- 祝賀会 備陽史探訪の会一〇周  
年記念 参加九〇人
- 三月四日 バス例会 竹林寺と松ヶ  
岳城跡(河内町) 参加五二人
- 講師 末森清司
- 三月一八日 総会講演会 いろは丸  
と坂本竜馬 講師 森本繁  
参加三〇人
- 四月一日 徒歩例会 志川滝山合戦  
の跡を訪ねて 参加六〇名
- 講師 田口義之
- 五月五日 第八回親と子の古墳巡り  
服部大池周辺 古墳部会  
参加一〇三人
- 六月一〇日 バス例会 御幸町の史  
跡巡り 講師 後藤匡史

- 七月二九日 座談会 論争邪馬台国  
田口・山口・後藤・出内  
参加四〇人
- 九月九日 講演会 藤井一族の興亡  
講師 立石定夫 参加四五人
- 九月二三・二四日 一泊旅行  
吉野ヶ里遺跡と名護屋城跡  
講師 神谷和孝 参加四〇人
- 一〇月七日 講演会 川口干拓史  
講師 松浦薫雄 参加三〇人
- 一〇月一四日 バス例会 鴨方町の  
史跡巡り 講師 種本実  
参加五八人
- 一〇月二八日 バス例会 豊松村の  
史跡巡り 講師 出内博都  
参加五二人
- 十一月一八日 バス例会 備前の古  
墳巡り 講師 古墳部会  
参加四三人
- 十二月二日 バス例会 戦国和智氏  
の史跡巡り(吉舎町)  
講師 田口義之 参加五四人
- 十二月一六日 忘年会・講演会  
歴史から学ぶ  
講師 内藤快範 参加四五人

#### 城郭部会

中世を読む会一二回実施  
油木町の中世山城調査

#### 古墳部会

- (七月・一二月三回実施)
- 四月 古墳巡り下見
- 五月 親と子の古墳巡り
- 七月 油木町山城調査(共同)
- 十一月 秋の古墳巡り
- 十二月 油木町山城調査(共同)

#### 二、平成二年度決算報告書

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
会費	343,700	事務費	20,126
例会収入	75,328	印刷費	127,115
書籍販売	71,100	通信費	98,823
広告収入	21,000	会議費	7,080
前年度繰り越し金	118,512	雑費	37,480
		次年度繰り越し金	339,016
合計	629,640	合計	629,640

#### 歴史民俗部会

- 五月一三日 府中市安楽寺
- 六月二四日 南宮神社と神宮寺
- 十一月二五日 神辺町の史跡

#### 三、監査報告書

平成二年度会計収支に関する帳簿  
並びに証拠書類の監査を行った結果、  
会計処理は適正に行われていること  
を認めます。

- 平成三年二月二四日
- 監査委員 藤代由子 ㊟
- 監査委員 堀エミ子 ㊟

#### 四、平成三年度事業計画

- 二月二四日 総会・講演会 近世瀬  
戸内地域における土地制度  
講師 青野春水
- 三月一〇日 散策会 岡山・倉敷ぶ  
らぶら歩き 講師 神谷和孝
- 三月一七日 バス例会 戦国小早川  
氏の城跡を訪ねて  
講師 末森清司
- 五月五日 第九回親と子の古墳巡り  
古墳部会
- 六月九日 バス例会 未定 歴史研

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
会費	375,000	事務費	30,000
繰り越し金	339,016	印刷費	140,000
雑収入	10,000	通信費	120,000
		交通部	60,000(20,000×3)
		山城	200,000
		山備予備	50,000
		志品費	124,016
合計	724,016	合計	724,016

五、平成三年度会計収支予算

七月二十八日 座談会 南北朝争乱  
 (地元の史跡を中心に)  
 講師 募集中  
 九月二二・二三日 一泊旅行  
 四国方面 講師 旅行委員  
 一〇月二七日 バス例会 神石町の  
 史跡巡り 講師 城郭部会

六、平成三年古墳研究会活動予定

古墳研究会活動予定

一月一七日 バス例会 小早川氏の  
 神社巡り 講師 堤勝義  
 一二月一日 バス例会 豊田郡本郷  
 町の古墳巡り 講師 古墳部会

△今年の活動方針▽ 基礎資料の  
 集積・基礎知識の集積！  
 一月：  
 二月：総会  
 三月：分布調査(神辺町下御領)上  
 御領)  
 四月：親と子の古墳めぐり下見  
 五月：親と子の古墳めぐり  
 六月：  
 七月：①  
 八月：  
 九月：秋の旅行  
 一〇月：  
 十一月：②  
 一二月：秋の古墳めぐり(豊田郡本郷町)

七、平成三年行事予定

城郭研究会

一、神石郡油木町山城調査……まとめ、報告  
 二、一〇月例会(一〇月二七日)  
 神石郡神石町探訪……①辰の口古墳(備後最大の前方後円墳)  
 ②泉山城(福永・高尾氏)  
 ③八尾城(宮下野入道)  
 三、中世を読む会(原則として毎月第三金曜日)

句)、など一年の節目節目に行われる祭であり、歳時ともいわれます。元々の起りは古代稲作を主とした農耕活動において、豊作を願う神様に供物をし、自分たちも供食し霊力をつけ、労働を休み、喜びを分かち、明日の活力を養う日として暦のなかに定着したものです。  
 言い替えば「日本人の心の故郷」ともいえる年中行事について、その由来、意味、各地の特徴などを掘り起こしてみようといった狙いです。

第一回目の学習会を三月一六日(土)午後一時三〇分より行いますので、多数の皆様の出席をお待ちしています。

☆場所：中央公民館(花園町)第二会議室

☆内容：正月から春にかけての年中行事について

種本 実(五四―二〇四七)

八、今年度の活動計画

歴史民俗研究会

①：何かの形で勉強会(報告書)  
 文献の読み会、資料館めぐりetc  
 ②：何かの形で勉強会(戸外中心) or 墳丘測量調査  
 (Other)  
 \* 毎月第三水曜日古墳講座復活  
 \* 墳丘測量調査

今年度は、くらしのなかの年中行事について学習してみたいと考えています。年中行事とは一月一日(元旦)、二月四日(節分)、三月三日(ひな祭り)、五月五日(端午の節

九、新役員の選任

事務局長より中村勤史氏の副会長就任が提案され承認を受けました。(任期一年、平成四年まで)



一〇、会則の改正

会長より次の条項の改正が提議され承認されました。(別紙参照)

一一、対潮楼への寄附

会長より輦対潮楼改修工事への寄附が提案され承認されました。(金額一万円)

小早川隆景公の居城趾  
木村城趾と新高山城趾  
三月例会に当って

末森 清司

平成三年度第一回例会として小早川隆景公の居城趾見学を計画した。この城趾は昭和五十八年の例会に見学実施されたものでこの度はアンコール例会となる。

木村城趾と新高山城趾を一日で見学し中世山城と近世平城郭へ移行する前の戦国期の城郭を見比べてその規模、縄張りを会員の皆様と一所に勉強してみたいと思つて実行に移す事にしました。

木村城趾は正嘉二年(一二五八)沼田小早川四代茂平公の次子政景公

が竹原荘を父からゆずられこの地の本拠城としてこの頃築城されたと伝えられる。

(注) 政景公は竹原小早川氏初代)中世山城の遺構をよくとどめた遺趾である。

隆景公はこの城に天文十三年(一五四四)十一月竹原小早川興景の養子として入城した。

公は毛利元就公三男として郡山城で生れ父元就公及びその重臣達により武将としての教育を受け城郭としての郡山城の縄張りをつぶさに知っていたであろう。戦国期の盛りに木村城に入った公はこの地の本拠城としては少し弱点がある様に思われど様に強化するつもりであったのだろうか。

天文二〇年(一五五一)当時弱体化した沼田小早川宗家へ養子として沼田高山城へ入城し沼田宗家と竹原の両小早川家は合体する。

沼田高山城は木村城と比較するとはるかに雄大な城郭構えをもち天文十三年(一五四四)尼子勢が攻めて来た時守り通した城ではあるがきびしい戦国期を戦い抜いていくには弱点も多い城である。

天文二十一年、公は対岸西の新高

山城を改修し本拠城として移城する。

新高山城は文永七年(一二七〇)沼田小早川五代雅平公が高山城の副壘として築城しその遺構は現匡真寺郭の下にある鐘の段郭群がそれに当ると思われる。

公はこの新高山を戦国期を戦い抜く城として大改修築を行い機能、防衛共に強い本拠城として毛利の一担で山陽道にその勢力をのばしていった。

城の遺構は今でも明確に残り本丸を中心として二の丸、三の丸郭群そこに残る巨大な石組みの跡。数千人の住民をも城内に入れてもまかないされる立派な石組の大井戸が数々ある井戸郭等、当時の雄大な縄張りを今でも充分知る事が出来る。

公はこの城を慶長二年(一五九六)三原城を築城し移城する迄四十数年間使用した。

三原城は公が永禄十年頃三原要害として築城し織田信長公が中国へ進攻し毛利との戦いになって以来本拠城として使用していた。

この城は近世城郭及び水軍城としての遺構を合せもつ名城であったが明治になり壊され今は天守台とその

内堀り、舟入跡、舟入櫓が残っているだけであるが隆景公の築城の偉大さを知るには立派な遺構である。

公は中世期、戦国期、近世へと本拠を構え移り変っていったが公の跡を追う様にその城郭をみていくのも楽しいものである。

この様な城跡の見方は一度だけでなく何回も足を運ぶ事によりその遺構の素晴らしさが増していく様である。城好きの方だけでなく、多くの皆様を知ってもらい見学してほしい史跡である。

高山・新高山・三原各城趾は小早川隆景公の史跡として国史跡である。木村城趾は居館趾と共に県史跡である。

(時) 三月十七日(日)午前八時  
J R 福山駅北口キャッスル  
ホテル前集合  
(会費) 会員二千七百元  
一般三千元  
(定員) 四十五名  
(申し込み) 事務局まで  
(備考) 弁当持参、雨天決行

### 城郭研究部会報告

出内 博都

部会の行事というより、探訪の会の有志の行事のようになったので、正式な報告という形ではないが現在の動きを紹介します。

平成二年度の神石郡油木町教育委員会との文化事業の一つとして山城の測量、調査を働きかけた処、委員会で承認され、その測量、調査をわが探訪会田口会長の責任において実施することになりました。昨年七月の下調査(田口、山口、網本、出内)以降種々連絡計画をたて、十二月にはいつて追畑城、平松城、小野山城(小野地区)権現山城、高須山城、大床山城(油木地区)面鍋城、土居城(仙養地区)の実測を終えました。その間、会員の有志の方、地元の方で延べ数十人役の協力を頂きました。茨の茂るブッシュの中でのテープ張り、吹雪の中ですべりながらの観測、雪道での自動車のチェーン装着、出来あがった一枚の絵図は何の変哲もないがこゝに至るまでの経過をたどると感無量なものがあります。

名もなき土豪たちの懸命に生きん

とした営みが狭い廊や小さな土塁にも偲ばれます。

以上の他に木路田城(土居? 新免)土居城、城山、矢田貝城、大野呂山(油木)青山城(仙養)については人工的な城跡が不分明だったり、後世に耕作、石切りなどで変形したりなどで判明しないが附近の状況からみて何らかの施設があったものと思われるので記録に残したいと思っています。

いずれにしてもせつかくの調査なので後日印刷にまとめて出版されるものと思いますので御期待下さい。

協力いただいた会員名

- 田口義之(七日)、網本善光(五日)
- 井村富貴男(一日)、馬屋原亨(四日)
- 佐藤錦司(五日)、佐藤秀子(一日)
- 高藤辰巳(三日)、七森義人(三日)
- 中村勤史(五日)、山口哲晶(五日)
- 出内博都(七日)

### 古墳研究部会情報

山口 哲晶

古墳研究部会では、今年から再び古墳講座を開催したいと考えています。

以前の古墳講座を憶えていらっしゃる方も居られると思いますが、毎月第二と第四水曜日に青年の家に於て弥生時代から古墳時代の後期の一部までを社会的に考古的に、特に備後地域周辺を中心にして、古墳の見方や特長などを勉強して来ました。

しかしながら残念な事に中断を余儀なくされ現在に至っています。私自身も当時の資料に目を通す度にもう一度古墳講座を復活させて、今一度頭の中を整理して基礎から勉強し直したいと思いい古墳講座の再開を念願していましたところ、今年ようやく再講できる見通しがつきました。詳細は後日報告しますが先ずは「古墳講座」の再開講のお知らせを致します。

### 事務局日誌

- 一〇月二七日 中央公民館にて 役員会兼事務会議 参加一五人
- 一〇月二八日 バス例会 豊松村の史跡巡り
- 講師 出内博都 参加五二人
- 一二月一八日 バス例会 備前の古墳巡り
- 講師 古墳部会 参加四三人
- 一二月二五日 事務会議 中央公民館において 参加九人
- 一二月二日 バス例会 吉舎町史跡巡り
- 講師 田口義之 参加五四人
- 一二月一六日 忘年会兼講演会兼役員会 参加一二人(四五人)
- 内藤快範「歴史から学ぶ」
- ワシントンホテルにて
- 三年一月一三日 新年会(役員会) 神谷宅にて 参加一二人
- 二月一〇日 事務会議 中央公民館にて 参加四人
- 二月二四日 記念講演会「近世瀬戸内海地域における土地制度」 講師 青野春水先生 参加四六人
- 終了後総会 参加三二人

備陽史探訪の会  
事務局  
〒720 福山市多治米町  
五一一九一八  
TEL (0849)581-6157